

令和2年度 事業報告

岡山理科大学附属高等学校

教育の質的改善に取り組み、サイエンスとグローバルを軸に「探求力・創造力・思考力」を身につけさせ、地域社会から一層信頼される高等学校づくりを推進します。



本校の最重要課題は、グローバル化している社会に対応した教育を展開することです。学園の建学の理念や高校のビジョンを遵守し、以下の項目に重点を置いた学校改革に取り組んでいきます。

○人材育成と教育力の向上

グローバル社会に対応できる人材の育成のために、これまでの教育内容や教育手法を改革します。自ら考え自ら行動する学修態度の定着に加えて、サイエンス分野での取り組み技法を基に、探究心を向上させる教育へと転換します。これらの教育を実現するために、教師力の向上に継続的に取り組みます。

○国際協力と社会貢献

学園が協定を締結している交流協定校との交流を強化し、英語教育を含めグローバル社会で「生き抜く力」を養成します。また、学校としての使命である地域社会との協働において、情報拠点として、地域社会の発展に寄与します。

○高大連携と社会連携の強化

岡山理科大学を始めとした関連大学、並びに企業体や研究施設などと連携し、キャリア形成に繋がる教育を進めます。また、専門的知識や専門的手法を身に付けさせ、グローバルな視野を併せ持つ人材の養成を行い、資質の向上を図ります。

○組織力の強化

組織の見直しを行うとともに、情報共有の強化や教科会議等を密に実施します。そして、情報を共有することで、学校組織の向上を図り、教職員の意識改革によって、組織力の強化に取り組めます。

○経営基盤の安定

生徒の確保に向けて学校組織が共同して、広報活動の改善・強化に取り組めます。また、社会的な説明責任を果たし、生徒及び保護者が満足できる学校、地域から認められる学校として発展するように、教職員が一丸となって経営基盤の安定に努めます。

岡山理科大学附属高等学校 校長 田原 誠

I. 教育について

1. 人材育成と教育力に関する中期目標		
中期計画	令和2年度事業計画	令和2年度事業報告
生徒一人ひとりのニーズを把握し、きめ細かな実践型指導を推進する。	<p>■サイエンスおよびグローバル教育の推進</p> <p>生徒の学習意欲の向上と学習習慣の確立及び基礎・基本的な知識や技能を高め、学力の定着と個々の成長に努める。</p>	<p>■サイエンスグローバル教育の推進</p> <p>新型コロナウイルス感染症対策のために実施した4・5月の臨時休業で、学習習慣が乱れた生徒も多くいたため、どの学年も授業進度の影響が出ない範囲で、基礎学力の定着に重点を置いた指導を行った。</p>
	<p>■アクティブラーニングの推進</p> <p>教員一人ひとりが、教科教育の専門性を高め、授業の質的改善を行い、生徒の基礎・基本的な学力を定着させ、生徒に応じた細やかな教育指導を行うと共に、アクティブラーニングなどの実践型教育の充実を図り、生徒が意欲的に学習できる環境の構築に努める。また、ICT教育も充実させ教育の活性化に努める。</p>	<p>■アクティブラーニング推進</p> <p>新型コロナウイルス感染症対策のため授業の進め方を大幅に見直した。アクティブラーニングの推進増を目指し、グループ討議や協働学習を取り入れる計画だったが、新型コロナウイルス感染防止の観点から、これらの活動は控えた。生徒の個々の学習活動で、個人的な見解をまとめ発表させる指導に切り替えて実施した。</p>
	<p>■ICT活用教育の推進</p> <p>ICT教育プラットフォームの機能を授業や復習など学習活動に活用する、iPadで授業を行うなど、ICTを活用した教授法を研究し、授業中に実践的、体感的な活動が生まれるように努める。積極的に校内外の研修に参加し、整備されているインターネット環境を有効活用する。</p> <p>ICTを活用した授業の研修会を開催する。</p>	<p>■コロナによる教育現場のICT活用教育の推進増</p> <p>臨時休業のためにオンラインでの教育提供が求められた。ICT推進担当主催の校内研修会を開催して教員の活用技術の向上を推進した。また、動画作成方法やiPadの効果的な活用など様々な場面での有効活用を検討し、実践した。</p> <p>生徒は1人1台iPadを持参し、校舎の88%がWi-Fi接続可能な環境を実現しており、小テストやアンケートの実施、授業ノートのクラウド保存および自己を振り返るポートフォリオの作成を行った。</p> <p>再度休校になっても、全教員がオンライン授業を行えるように、指導法や教材作成の研究を進めている。</p>
<p>■基礎学力向上への取り組み</p> <p>学習内容の定着を目的に、単元のまとめ段階で、確認テストに加え、発表や討論の時間を設定し、対話的な活動を行う。100分授業の利点を有効に活用する。</p>	<p>■基礎学力向上への取り組み</p> <p>新型コロナウイルス感染防止の観点から対話的な活動は控えているが、単元単位での学習内容定着のための確認テスト等の活動を実施した。</p>	

	<p>■生徒一人一人のニーズの把握 Classi のポートフォリオ機能や LHR でのアンケート調査などで、クラス担任が生徒の学習状況を把握し、面談を通して、学習指導を行う。</p>	<p>■生徒一人一人のニーズの把握 令和3年度からの新たな大学入試において、Classi に繋がるポートフォリオの利用が見送られ、大学入試での活用の機会はなくなったが、各担任が担当する生徒の活動状況把握等で活用した。また、高学年においては受験時の出願書類（志望理由書等）の作成の際の基礎資料として活用した。</p>
	<p>■進学指導プログラムの充実 外部テストのデータを活用し、進路目標に合わせた、学習到達目標を設定する。</p>	<p>■進学指導プログラムの充実 外部テストについては各科コースで生徒の現状にあう学習到達目標へ向け、基礎学力の向上、志望校のレベルへの到達など生徒個々のレベルでの学力アップに努めた。進学指導の際の基礎資料として最大限に利用した。</p>
<p>リーダーシップやチーム力を発揮できる人材を育成する。</p>	<p>■国際バカロレア（IB）教育プログラムの導入 IB 教育の実践により、自らの力で考える思考力とコミュニケーションを基軸とする協調性を養成する。プレゼンテーションなどの実施を通して、伝える力を育成し、リーダーシップとチームワークを発揮できる人材を育成する。</p>	<p>■国際バカロレア（IB）教育プログラムの導入 IB カリキュラムは二年次からで、本年入学した一年生は文科省の必修科目を中心に履修中だが、IB の教育手法を活かし、協働学習やプレゼンテーション等、生徒がアクティブに学べる環境下で、生徒にはかなりの成長が見られた。協働学習では各生徒がそれぞれの役割を分担し、共に探究し、コミュニケーション力、社会性スキルを養っている。プレゼンテーションについては苦手意識を持っていた生徒もいたが、現在は臆することなく、すべての生徒が論理的に発表できるようになった。フィリピンの生徒との協働学習をオンラインで実施した（10月30日）。この活動を通して、英語によるコミュニケーションを実践し、多様性の理解と俯瞰的な考え方を深めることができた。このような教育環境下で生徒はそれぞれの地域、および、世界で活躍できるリーダー性を培っていると考えている。</p>
	<p>■サイエンスおよびグローバル教育の推進 チームワークの大切さを実感できるよう、共同で作業を進める場面を授業に取り入れる。また、その作業のまとめとして、日本語または英語で発表することでプレゼンテーション能力を高める。学習発表会や文化祭の機会を利用して、学習内容のプレゼンテーションを行う。</p>	<p>■サイエンスおよびグローバル教育の推進 新型コロナウイルス感染症対策のため、協働学習は行わなかったが、学習内容の発表のための作業は個々に行わせた。学習のまとめとしてのプレゼンテーションは、口頭発表に加え新型コロナウイルス感染症対策のために展示発表も導入した。</p>

Ⅱ. 学生支援について

1. 正課外活動支援に関する中期目標		
中期計画	令和2年度事業計画	令和2年度事業報告
<p>正課外活動に対する支援。</p>	<p>■正課外活動支援の充実</p> <p>精神と身体の高揚を一体的に喚起する教育活動を実施するとともに、正課外活動を通じて社会性に優れた人材の育成を進める。</p> <p>校外の施設訪問や清掃ボランティア活動などを行うことで、座学では得られない奉仕の精神や活動による達成感を得られる。</p> <p>部活動を充実させ、身体的能力の向上、文化的資質の向上を目指す。また、生徒一人一人に目標を設定させて活動を促す。</p>	<p>■正課外活動支援の実施</p> <p>グローバルサイエンスコースでは、通学路の一斉清掃を8月、3月に実施した。</p> <p>新型コロナウイルス感染症のため郊外の施設訪問は実施できなかった。来年度実施が可能か検討している。</p> <p>部活動は、新型コロナウイルス感染症による休業中は全面的に活動を停止し、学校再開後は活動を開始したが、遠征等の対外試合には制限を設けたため、全面的な再開には至らなかった。競技によって全国大会の有無に差があり、生徒に目標設定させることが難しい場合があった。</p>
2. 多様化する生徒支援に関する中期目標		
中期計画	令和2年度事業計画	令和2年度事業報告
<p>多様化する生徒支援。</p>	<p>■教育相談体制の充実</p> <p>多様な生徒に応じた細やかな教育指導を行うとともに生活指導の充実を図る。</p> <p>生徒一人一人の養育歴や家庭環境に配慮し、保護者と連絡を取り合い、最適な指導方法を研究する。また、担任は教育相談室や外部機関と連携をとり、多角的に生徒を見守る。複数相談員の体制を整える。</p>	<p>■教育相談体制の充実</p> <p>カウンセラー二人体制で、生徒一人ひとりに応じた教育相談が実施できるよう努めた。また、外部機関との連携を図りながら、円滑な指導体制でカウンセリングに臨んだ。</p> <p>相談件数の増加や複雑化する相談内容にカウンセラー二人体制での対応は物理的に難しくなっている。カウンセラーの増員が必要となってきた。</p>

Ⅲ. 国際化について

1. 国際理解と国際貢献に関する中期目標		
中期計画	令和2年度事業計画	令和2年度事業報告
国際化を日常的なものにするとともに、多角的な国際交流事業の更なる充実を図る。	<p>■交流協定校との交流</p> <p>国際理解に重点を置き、異文化交流に積極的に取り組む。生徒に国際的感覚を身近に感じさせるために、留学生を可能な限り受け入れ、また、海外校との交流協定を締結し、留学制度を確立させたい。</p> <p>交流協定により訪問を受ける外国からの研修団との交流、関連大学からの留学生との交流などの機会に、生徒を積極的に活動させることによって、異文化交流を推進する。</p> <p>本校の授業を履修できる日本語力を持った留学生を受け入れ、本校の日本人学生と交流することで、生徒の交流に向けた学習意欲の向上を行う。</p> <p>海外研修、短期留学、長期留学の推奨によって、国際理解教育の推進を図る。</p> <p>ネイティブ教員を増員することによって、教員にも多様性をもたらす。</p>	<p>■交流協定校との交流</p> <p>例年通り、本校生徒たちが異文化交流出来るように昨年度から計画を立てていた行事は、新型コロナウイルス感染症の世界的感染のため、全てキャンセルになった。</p> <p>その中でも国際交流局の協力も得て、計画していたインターナショナルコースのスリランカ研修旅行や、フィリピン・バギオ大学附属高等学校生の本校 IB コースでの受け入れについては、オンラインでの協働学習に変更した。Zoom や Google Meet をプラットフォームとして、スリランカ現地の学生と本校生徒とのミーティングを通して、異文化交流やグループワークを実施した。</p> <p>また、生徒が国際感覚を身近に感じられるよう、留学生を可能な限り受け入れており、中国から日本に入国が出来ていない生徒たちには Skype を利用してオンライン授業を毎日実施した。来年度の国際交流計画について、コロナ禍に柔軟に対応できる企画を立てるように準備をしている。</p>
英語運用能力（聞く・話す・読む・書く）の向上を図るために、英語の「基礎学力」の定着及び「応用学力」の伸長に対応できる指導法を工夫する。	<p>■英語教育の強化</p> <p>英語能力を向上させるために英文教科書のみならず、イングリッシュ・キャンプや4技能育成に優れたケンブリッジ英検等の導入を図り、英語でのコミュニケーション能力育成のための特徴的な教育環境の構築を図る。また、国際バカロレア・ディプロマ教育の実施により海外への進学の実現を図る。</p> <p>ケンブリッジ英語検定の受検を視野に入れた検定対策授業をグローバルサイエンスコース、スポーツサイエンスコース、中高一貫コースに設定し、ケンブリッジ英検以外の英語検定への受験を積極的に促す。</p>	<p>■英語教育の強化</p> <p>英語能力を向上させるために導入を図ったケンブリッジ英検等への取り組みでは、学校設置科目で「ケンブリッジ英語」を設け、ケンブリッジ・イングリッシュ準拠の講習受講経験者が授業を担当して、4技能育成に優れたケンブリッジ・イングリッシュのノウハウを基に生徒への教育を行った。ケンブリッジ英検以外の英語検定への受験を積極的に促し、令和2年10月と令和3年1月に実用英語検定を実施した。ケンブリッジ英検は本校で12月に実施した。今後もケンブリッジ英語検定協会等とは密接な関係を保ち、英語指導に生かすようにする。</p>

	<p>■国際バカロレア（IB）教育プログラムの導入</p> <p>インターナショナルコース、国際バカロレアコースが中心となって、イングリッシュキャンプ（合宿）を行い、コミュニケーション力、プレゼンテーション力の向上を目指す。</p> <p>英語学習の動機づけ、英語の基礎力の定着を目指し、e ラーニングやオンライン英会話を活用する。</p>	<p>■国際バカロレア（IB）教育プログラムの導入</p> <p>英語学習の動機づけ、英語の基礎力の定着を目指したカリキュラムを、インターナショナルコース、国際バカロレアコースを中心に実施した。特にコミュニケーション力、プレゼンテーション力の向上については、課外でも「考えるカフェ」などのイベントを行い、論理的思考に根差したコミュニケーション力、プレゼンテーション力育成を図った。</p> <p>e ラーニングの活用については、インターナショナルコース（2年生）、グローバルサイエンスコース（1・2年生）が、オンライン英会話の活用については、グローバルサイエンスコース、教育学科、インターナショナルコースの163名が受講し、生徒は熱心に取り組んだ。</p>
--	---	---

社会連携・貢献について

1. 高大連携・社会連携に関する中期目標		
中期計画	令和2年度事業計画	令和2年度事業報告
<p>学習において、岡山理科大学との高大連携の強化を図るとともに、生徒の学力の伸長を目指す。</p>	<p>■関連校との高大連携による質の高い教育の提供</p> <p>生徒に関連校の大学の講義等を履修する事で、学習の学問的な発展などに興味を抱かせ、大学進学後の取得単位認定につなげることで、高大連携を強化する。また、生徒が大学の教育研究に触れることで、生徒一人ひとりの能力・適性や自己の発見と成長に繋げたい。</p> <p>岡山理科大学との連携、各学年に高大接続担当を置き、円滑な活動に配慮する。</p> <p>岡山理科大学との高大連携の中心であるグローバルサイエンスコース1年次、2年次のサイエンスワーク（大学聴講）、2年次、3年次のゼミ活動については、開講科目の増加による充実を図る。</p> <p>■関連校への進学支援</p> <p>高大連携によって岡山理科大学とのマッチングを進め、能力と意欲を持った生徒が大学に高く評価されて受け入れられる道を築く。</p>	<p>■高大連携事業3年目を迎え、高大連携プログラムを受けてきた生徒がいよいよ来年度、大学へ</p> <p>高大連携教育として岡山県唯一の教育プログラムである1年次のサイエンスワークでは、研究の面白さや、科学の多様性や研究の多様性を認識させつつ、講義のテーマとした分野に関係した高校での学びとの関連を理解することができた。また、2・3年次では大学の研究室において課題を設定し、その課題を解決するための方法を学ぶことができた。その中でもゼミ活動に参加して、その研究室が対象としている研究分野の研究手法や研究の進め方、さらに卒論発表会などへの参加によって、科学の世界におけるコミュニケーション方法の理解を深めることができた。</p> <p>岡山理科大学の約50名近くの教授陣と本校教員で「同じ立地内にいる高校生を高校・大学で育てる」ことの将来図がしっかり見えてきた。約20名のゼミ活動参加生徒のほとんどが岡山理科大学に進学した。来年度もさらに高大連携の強化を図り、生徒の学力の伸長と目標達成を目指したい。</p> <p>■関連校への進学支援</p> <p>コロナ禍の休業のため4、5月は実施できなかったが、6月以降、グローバルサイエンスコースを中心として「サイエンスワーク」、「課題研究」等に取り組んでいる。また、8月7日（金）には『大学教職員による「自分レベルアップ面談会」』と題して岡山理科大学の教員が本校生徒を対象に広く進路選択のアドバイスを行う会を実施した。</p>

<p>社会との協働で、生徒の視野が広くなり常識的な習慣を身につけられるように、社会との繋がりを強化する。</p>	<p>■提携企業等と連携した教育の提供</p> <p>多様な社会体験は、社会人として必要な知識や技能を身につけ、家庭や学校だけでは身につけることができない様々なルールや社会習慣についても学ぶことができる。家庭や学校の教育力と地域の教育力を連携する事で、実社会で生き抜くために役立つ多様な能力を養成する。</p> <p>自主活動期間を中心に、福祉施設や校外清掃活動などボランティア活動の場を提供する。</p> <p>自主活動期間や長期休業中におけるキャリア教育の一環として職場訪問を計画する。</p> <p>家庭と協力し、県や市が主催するコミュニティ活動、地元の町内会活動など校外の諸活動への積極的な参加を促し、社会の一員としての意識を醸成する。</p>	<p>■提携企業と連携した教育の提供</p> <p>コロナ禍のため、学校再開後は生徒が自ら目標を定める自主活動期間にも通常の授業を行ったために、学外での取り組みができなかった。そのような状況の中でも、8月と3月に各回約30名の生徒と教員が岡山駅西口から運動公園までの「ボランティアロード」の清掃ボランティアを実施した。</p>
	<p>■国際バカロレア（IB）教育プログラムの導入</p> <p>国際バカロレア教育における活動に倣い、他のコースにも一定のボランティア活動時間を卒業要件に加えるべく検討する。</p>	<p>■国際バカロレア（IB）教育プログラムの導入</p> <p>検討を進めたが、卒業要件に加えるためには単位認証と履修課程表への組み入れが必要であり、卒業要件としない形でのボランティア活動の導入を検討することとした。</p>

V. 組織・運営について

1. 組織力の向上に関する中期目標		
中期計画	令和2年度事業計画	令和2年度事業報告
<p>学校の方向性に対して教職員が一丸となり、ベクトルが一つになるような組織作りを目指す。</p>	<p>■学校運営会議の強化</p> <p>教育職員と事務職員が一体となり、附属高校の方向性を共有するために、運営会議や教科会議などを定期的開催し、協議した内容を全校の職員会議に諮る強力な運営体制を維持継続する。さらに、校務組織を簡素化して全員が校務運営に参画できるように改革し、構成員の意識の向上に努める。</p> <p>学校運営会議を毎週行い、学校を取り巻く現状を報告、確認することによって、学校運営に必要な措置を講じる。</p>	<p>■学校運営会議の強化</p> <p>校務分掌やコースなど各部署が業務を能動的に立案し、学校運営会議で検討し、職員会議に諮る、という流れを遵守し、業務について教職員全員で共通理解を得られるようした。</p> <p>高校入試をとりまく状況、本校の入試と入学者の状況、大学進学状況、模擬試験結果と進学結果などを逐次数値をとりまとめて、情勢の共有を行った。</p>

	<p>■教科会議の強化・連携 教科会議、分掌会議を定期的に開催し、議事録によって検討事項、決定事項を校長、教頭に報告する。</p>	<p>■教科会議の強化・連携 教科会議における検討事項、決定事項は教科主任が議事録を提出することにより、校長・教頭へ報告した。</p>
	<p>■職員会議の強化 職員会議以外にも、メールによって、教職員間の情報共有を図る。</p>	<p>■職員会議の強化 教職員への連絡事項は、職員朝礼、学内メール、Classi を利用し、伝達した。 高校入試をとりまく状況、本校の入試と入学者の状況、大学進学状況、模擬試験結果と進学結果などを過去約 10 年間の数値をとりまとめて、教職員間で情勢の共有を行った（11 月 10 日）。</p>
	<p>■各科の合同会議 複数の校務分掌を担当することによって、業務への理解、業務の分散化を図る。</p>	<p>■各科の合同会議 大きな検討事項がなかったため、各科の合同会議は行わなかった。年間を通じ、コース、学年、校務分掌が単独で対応できる案件が生じている状態であった。</p>
<p>学校運営が円滑になるように、チームリーダーの養成や研修を実施し、それが全体へ波及するような仕組みを考える。</p>	<p>■教職員の資質向上への取組み 学校現場で必要となるリーダーシップ性を向上させるために、各種の研修やワークショップ等への参加を通じて、個々のスキルアップを図り、組織の一員として自己の確立へ導く。</p>	<p>■教職員の資質向上への取組み 新型コロナウイルス感染症対策のため、各種の研修が取りやめになったが、ICT を活用した指導法の研究、研修は進み、教員個々のスキルアップに通じた。</p>
	<p>■国際バカロレア（IB）教育プログラムの導入 国際バカロレア、新たな大学入試に関係する研修に加え、新学習指導要領に関係する研修へ積極的に参加する。外部団体主催の教科指導に関係する研修を重要視し、研修への参加を強く勧める。 研修で得た情報は、職員会議や校内ワークショップにて全教員で共有する。</p>	<p>■国際バカロレア（IB）教育プログラムの導入 国際バカロレア教育プログラムの実践を全教員で研修するには至っていない。「考えるカフェ」に参加することで、IB 教育の理念を授業に導入する教員が増えている。</p>

VI. 内部質保証について

1. 内部質保証に関する中期目標		
中期計画	令和 2 年度事業計画	令和 2 年度事業報告
<p>内部質保証システム体制の確立と第三者評価の導入。</p>	<p>■学校運営会議の強化 教育職員と事務職員が一体となり、附属高校の方向性を共有するために、運営会議や教科会議などを定期的に開催するとともに、自己点検及び外部評価を実施する。</p>	<p>■学校運営会議の強化 校務分掌やコースなど各部署が業務を能動的に立案し、学校運営会議で検討し、職員会議に諮る、という流れを遵守し、業務について教職員全員で共通理解を得られるようにした。学校運営全般については、年度末に定期的に保護者全体に依頼する学校調査アンケートの結果を第三者の評価として活用している。</p>

	<p>■教科会議の強化・連携 教科指導に関しては、教科主任が中心となり、授業研究を進める。</p>	<p>■教科会議の強化・連携 教科会議における検討事項、決定事項は教科主任が議事録を提出することにより、校長・教頭へ報告を行った。</p>
	<p>■公開授業の実施と検証 年数回、教頭、教頭補佐等によって授業評価を行い、教育の内容と教員指導力の改善などを進める。 年数回、生徒による授業評価を実施し、授業担当者による効果的な授業の進め方を検討する。(非常勤講師を含め全教員対象として実施予定)</p>	<p>■公開授業の実施と検証 授業時間数と授業進捗の確保を最優先しているため、授業評価は行わなかった。来年度は、全校を上げての研究授業の実施を検討したい。</p>

VII. 運営・財政基盤について

1. 経営基盤の安定化に関する中期目標		
中期計画	令和2年度事業計画	令和2年度事業報告
<p>生徒を安定的に確保するために志願者の増加を図る。</p>	<p>■広報活動の充実 附属高校としての評価を高めるためにブランディングを定め、教育活動並びに教育内容を多角的に伝え、広報活動の充実を図る。また、部活動は広報的要素が大きいことから、教育と併せた広報活動を展開する。さらに経営状況の分析をもとに、収支バランスの健全化を目指し、効率的、効果的な広報活動の展開を進める。</p>	<p>■広報活動の充実 今年度は、新型コロナウイルス感染症により従来方式の広報活動の実施が困難と予測されたため、若手教員を中心に検討委員会を開催して活動方針を立案し、実施した。 岡山理科大学を含む関連大学・専門学校との連携を進学実績・日常的な取り組みを通してアピールし、他の私学との差別化を図ったが、その効果が出ているかは今後の分析による。 部活動のアピールは部活動体験オープンスクールの実施がなかったため各部で対応した。</p>
	<p>■オープンスクール・入試セミナーの充実 岡山理科大学との連携を特徴として充実を図る。 中学校、塾訪問、説明会参加により各コースの特徴をわかりやすく周知することで、本校が求める生徒像を外部に具体的に発信する。 広報活動の迅速化、効率化を図れるように、ハード面、ソフト面で入試広報課への支援を増やす。</p>	<p>■オープンスクール・入試問題解説講座の充実 今年度は、新型コロナウイルス感染症対応のため、ホームページでの学校説明会を1回行い、オープンスクールの開催を2回に限定し、参加人数も制限して実施した。 ・ホームページ学校説明会（7月24日から31日） ・第1回オープンスクール 9月13日 ・第2回オープンスクール 10月18日 オープンスクールでは、希望者全員が参加できる状態ではなかったため、地区別説明会の定員を昨年度よりも多くして補ったが、来場者数は例年並みであった。 広報活動の迅速化、効率化のために、入試広報部門に対して行った、支援補助教員の配置は入試広報業務の経験が欠けるために必ずしも十分な効果が得られなかったため、経験者の登用が重要と考えられる。</p>

	<p>■入試制度の検討と見直し</p> <p>インターネット出願を導入し、入試業務の簡素化、迅速化を進める。競技人口の多い競技を部活動として志望する生徒を積極的に募集することによって、生徒増を図る。</p> <p>社会のニーズを精査し、新しいコースや系などの研究を進める。</p>	<p>■入試制度の検討と見直し</p> <p>インターネット出願の実行システムを完成させ、受験者などの出願操作に必要な説明資料を作成した。また、入試広報活動のなかで、その利用方法について関係者に広く説明を行った。このシステム構築の中で、入試制度の簡素化についての必要性を痛感した。</p> <p>競技人口の多い部活動を志望する生徒を積極的に募集するために、特待生制度の見直し、生徒募集に効果的であった。</p> <p>本校の入試と入学者の状況、大学進学状況などの数値をとりまとめる中で、本校の特徴、本校への社会的ニーズ、当面の間の方向性を示唆する結果を得た。</p>
<p>補助金など学外資金の獲得を強く推進する。</p>	<p>■提携企業等と連携した教育の提供</p> <p>生徒の安定的確保が、補助金の交付額の改善を導き、安定経営に繋がる。また、SSH などの外部資金を獲得することで、教育内容を広め、生徒の学習意欲の高揚に繋げるため、募集活動が幅広く展開できるよう努めたい。</p> <p>募集定員数の生徒を確保できるよう、全教職員が協力して入試広報活動に取り組む。</p> <p>新体制の教育活動の安定化を目指す中、外部資金を獲得できる教育活動の導入に関して検討を始める。</p>	<p>■提携企業等と連携した教育の提供</p> <p>学校の安定的経営は入学者の確保によるところが大きいことを肝に銘じ、全教職員で募集活動を行っている。新型コロナウイルス感染症対応のため、オープンスクールの開催回数は例年より減らしたが、中学校訪問、地区別説明会、入試解説講座は以前と同様に実施した。</p> <p>国際バカロレア関係で外部資金を獲得した（日本国際バカロレア教育学会授業研究会事業）。今後も各種外部資金の獲得を目指したい。</p>

主な行事予定

4月9日	入学式（中止）
5月18日	PTA 総会（中止）
6月1日	始業式
7月14日	後援会総会（通信）（中止）
8月2日	1期卒業式（通信）
9月25日	体育祭
10月2日	文化祭
11月11日、12日	球技大会
11月21日	文化祭（通信）
12月6日	2期卒業式（通信）
1月9日	県外生入試
1月28日 29日	選抜1期入試
2月19日	選抜2期入試
3月1日	卒業式
3月15日	3期卒業式（通信）
3月19日	終業式

生徒・教員数

■在籍生徒数

(令和2年5月1日現在)

課程・学科・コース名				入学定員	入学者数	収容定員	在学者数	
								1年
全 日 制 課 程	○ ○ ○ ○ ○		普通 科	グローバルサイエンスコース	80	278	400	278
				総合進学コース	180			
				国際バカロレアコース	20			
				スポーツサイエンスコース	80			
				中高一貫コース	40			
	普通科 計				400			
	○ ○ ○ ○ ○		普通 科	グローバルサイエンスコース			400	269
				総合進学コース				
				インターナショナルコース				
	教育学科						40	3
○ ○ ○ ○ ○		普通 科	グローバルサイエンスコース			360	172	
			インターナショナルコース					
			スポーツサイエンスコース					
全日制課程 計				400	278	1,200	722	
通信制課程(広域) 普通科						200	49	
総合計				400	278	1,400	771	

(単位：人)

■卒業生数等一覧

(令和2年度)

区分	卒業者	就職希望者	就職者	就職率	進学希望者	進学者	進学率	退学者・ 除籍者	休学者	留年者 ※
		A	B	B/A	C	D	D/C			
全日制課程	175	10	10	100%	165	161	98%	10	1	0
通信制課程	20	6	6	100%	8	6	75%	2	3	0

※ 修業年限を超えて在籍している生徒数 (令和2年4月1日現在)

(単位：人)

主な就職先	JFEスチール(株)、(株)デンソー、ダイハツ工業(株)本社、(株)三井E&Sマテリアル、いすゞ自動車中国四国(株)、佐川急便(株) JFE物流(株)西日本事業所、シマフンコーポレーション(株)、ロードワン岡山(株)、岡山国際ゴルフ倶楽部
主な進学先	東京大学、岡山大学、香川大学、北見工業大学、兵庫教育大学、高知工科大学、青山学院大学、駒澤大学、東海大学 日本大学、東洋大学、同志社大学、立命館大学、関西大学、関西学院大学、甲南大学、近畿大学、京都産業大学 岡山理科大学、倉敷芸術科学大学、千葉科学大学、吉備国際大学 他

■教職員数

(令和2年5月1日現在)

校長	教頭	教諭	教員 計	事務職員
1	3	56	60	13

(単位：人)

財務関係

■事業活動収支

(単位：千円)

科目		年度	令和元年度 決算額	令和2年度 決算額
教育活動 収支	収入	学生生徒等納付金	484,676	432,558
		経常費等補助金	267,772	245,172
		その他収入	73,771	37,974
		計	826,219	715,704
	支出	人件費	823,228	779,633
教育研究経費		235,661	242,303	
管理経費		127,955	119,589	
その他支出		202	0	
計		1,187,046	1,141,525	
教育活動収支差額		△ 360,827	△ 425,821	
教育外 収支	収入	受取利息等	1	2
		借入金利息等	8,068	6,428
	教育活動収支差額		△ 8,067	△ 6,426
経常収支差額		△ 368,894	△ 432,247	
特別 収支	収入	資産売却差額等	2,503	1,262
		資産処分差額等	9,809	1,367
	特別収支差額		△ 7,306	△ 105
基本金組入前収支差額		△ 376,200	△ 432,352	
基本金組入額合計		△ 234,278	△ 204,922	
当年度収支差額		△ 610,478	△ 637,274	

■施設設備整備計画（抜粋）

(単位：千円)

事業名	金額
国際バカロレアコースHR教室改修	9,646